

<随想>近藤忠義先生と校歌

塩谷, 郁夫 / シオヤ, イクオ / SHIOYA, Ikuo

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

54

(終了ページ / End Page)

55

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019861>

近藤忠義先生と校歌

塩谷 郁夫

阪神大震災後の甲子園で一九九五年夏季の全国高校野球選手権大会が開催された。暑い夏休みに行われるこの野球大会には思い出も多く、毎年テレビに釘付けになる。それは若い高校生の活躍に心引かれるからでもある。特に東北人であり、東北の地で高校生たちと生活している私にとっては、東北六県の選手たちの活躍に感激し応援して来た。今年は秋田県の代表として金足農業高校が出場して勝ち残っていた。このチームは特別に有名な選手はいないが、全員がよくまとまって投打に活躍していたので応援した。勝ち残るとテレビでは、その校歌を放送する。金足農高の校歌の作詞者の名を見て注目したのは、やはり東北在住、新庄市の大滝十二郎君であった。親友の大滝君は作詞者の近藤忠義というのは、私たちが法政で教わ

った近忠さんではないかとの手紙をよこした。そこで直ぐ調査をした。

私たちは、一九五二年に法政の日本文学科に入学して、五三年に川崎木月の教養部から市ヶ谷に移り近藤忠義先生に「更級日記」の講読や近世文学について教えを受けた。近藤先生は日本文学科に入学した学生はもちろんだが、他の学部の子生諸君からも近忠さんと敬愛を込めて呼ばれ慕われていた。

先生はあまり野球はお好きでなかったようである。私たちの近代文学研究会をご指導下さっていた小原元先生が、大の野球好きで六大学野球はもちろん、プロ野球を見に水道橋の後楽園球場（現東京ドーム）へよくお出かけになった。私たちが六大学野球を見に外苑球場まで行ったものである。それを知った近藤先生は野球もよいが学問に集中しなければ困るとおっしゃられたものである。その近藤先生作詞の校歌が甲子園の球場で歌われるとは考えていらっしやうたかどうか。しかし、近藤先生は若い世代にはいつも期待して激励された方であったからやはり喜んでいらっしやうと思ふのである。作詞された校歌にも、その様な思いが込められている。

*^{うま}可美しき郷 ^{きと}我が金足（*初案・^{クニ}国土の^{ハタテ}涯）

霜しろく 土こそ凍れ

見よ草の芽に 日のめぐみ

農はこれ たぐひなき愛

日輪の たぐひなき愛

いざやいざ 共に承けて

やがて来む 文化の黎明^{あさけ}

この道に われら拓^{ひら}かむ

われら われら われら拓かむ

三連型の校歌で、作曲は岡野貞一である。有名な「春の小川」「朧月夜」「故郷」「紅葉」など戦時中に学校で、私たちが教わった唱歌の作曲家である。近藤先生の作詞かどうかを先生の奥様にお手紙で確認したところ、確かに先生の作だとのこと返事を戴いた。金足農高からも当時の東京音楽学校用箋（現東京芸大）にタイプした詩と、岡田貞一東京音楽学校教授の作曲の原楽譜のコピーを送って戴いた。近藤先生は東京音楽学校の講師として、一九三〇年に就任され、三二年に思想事件（反戦の立場）で講師を解任されている。金足農高の校歌はこの頃の作詞と推測される。この事件を先生は『胴体がしゃべる』という鋭い文章で批判されている（新日本出版社「近藤忠義日本文学論」²に収録）。この事件のあと法政大学と日本体育会体操学校（現日本体育大学）の講師に就任されたのである。先生は日体大の校歌も作詞されている。

先生は四〇年に再度東京音楽学校講師と法政大学教授を兼任された。先生は四四年十二月に突然治安維持法違反という理不尽な理由で玉川警察に拘留されている。この時に日本体操学校の学生たちが、警察の扉の外で先生作詞の校歌を歌ってくれ、非常に元気が出たと生前先生は話されていた。先生の若者を愛する気持は学問上にもよく現われているが、常に人間的理想を語って倦むことがなかった。それが学生に深い敬愛を抱かせたのである。

先生から私たちが教えを受けた五〇年代は、国民文学論や日本文学の遺産について熱く論じられた時代であった。先生の「近松ゼミ」での歌舞伎論など、現在も私の研究や教育の基礎として生きているのである。先生の生まれ故郷の神戸が激しい震災に襲われたが、その土地で若者を元気づける校歌が甲子園球場に高らかに響きわたったことは実に印象深い事であった。

（しおや いくお・一九五六年卒）

（編集部注）

金足農業高等学校校歌の二番は次の通りです。

二、可美しき郷 我が金足、

風あつく 土こそ灼くれ

見よ 草の葉に 日のめぐみ。

農はこれ かぎりなき意志、

日輪の かぎりなき意志。

おゝ げにや この意志

いざやいざ 共に承^つけて、

やがて来む 文化の黎明^{アサケ}

この道に わられ拓^{ひら}かむ。